

博士学位請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 安達香織

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 杉本智俊

文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授 安藤広道

文学研究科委員

副査 中央大学文学部教授 小林謙一

副査 早稲田大学文学部教授 高橋龍三郎

論文題目 東北地方北部における縄紋時代中期後半の土器型式編年研究

論文概要

本論文は、東北地方北部の縄紋時代中期後半を対象とし、土器型式による編年体系の再構築を目指したものである。土器の型式編年は考古学研究の基礎となるものであるが、当該地域、時代に関しては未だ混乱がみられるからである。

安達君は、この課題に取り組むため、まず縄紋土器型式編年研究の基礎を築いた山内清男の方法を綿密に解題し、それを踏まえた自身の方法論を提示している。そのうえで、当該地域・時期のこれまでの研究の問題点を整理し、編年の基準となる最花 A 式土器の標本資料を整理、公開している。また、この資料を組織的に分析して地域編年を確立しており、さらに、それを広域編年に組み込むことで新たな課題を抽出するといった、きわめて体系的かつ幅広い議論を展開している。

本論文の構成は以下のとおりである。

序

第 1 章 土器型式編年研究に関する方法論的考察

- 1 問題の所在
- 2 研究の到達点と本研究の視座
- 3 縄紋土器の系統分類
- 4 型式研究の意義
- 5 本研究の方法論

第 2 章 東北地方北部縄紋時代中期後半の土器型式編年研究史

- 1 型式網における東北地方北部中期後半
- 2 最花貝塚遺跡の調査と「最花式」土器
- 3 東北地方北部中期後半の土器型式編年研究の諸問題
- 4 結語

第 3 章 青森県最花貝塚遺跡出土土器標本の整備と報告

- 1 最花貝塚遺跡出土土器標本提示の意義
- 2 標本の保管状況と整理作業の方法
- 3 A地点出土土器
- 4 結語

第4章 縄紋土器の技法と型式—分類指標としての製作工程—

- 1 最花貝塚遺跡A地点出土土器の製作工程を含めた技法・形態・装飾の分析
- 2 中の平遺跡出土第Ⅲ群土器の製作工程を含めた技法・形態・装飾の分析
- 3 最花貝塚遺跡A地点出土土器と中の平遺跡出土第Ⅲ群土器との比較
- 4 仮称最花A式と仮称中の平Ⅲ式
- 5 結語

第5章 縄紋土器の文様の構造と系統

- 1 最花貝塚遺跡A地点出土土器の文様の構造的分析
- 2 榎林式と他型式との文様構造の比較
- 3 最花A式と他型式との文様構造の比較
- 4 縄紋時代中期後半の東北地方北部と中南部との型式間の関係
- 5 結語

第6章 東北地方北部中期後半の土器型式編年とその広範な比較・総合への見通し

- 1 東北地方北部・中南部・関東地方の中期中葉～後葉型式間の関係
- 2 広範な比較・総合への見通し
- 3 広域における土器型式編年研究の重要性

結

各章の概要

第1章では、まず、型式編年の方法が検討される。縄紋土器の型式編年研究の基礎を築いたのは山内清男であり、現在に至るまで、山内が戦前に構築した縄紋土器全体に及ぶ編年体系を基盤として研究が進められている。しかし、山内自身は自らの方法について詳述することがなかったため、その後の研究において、山内の方法に対する理解が十分に定着せず、研究の混乱の一因となってきた。安達君は、山内の諸論文の丁寧な読解を進めるとともに、生物学の一分科である系統分類学の方法を参照することで、山内の方法が、土器の諸形質の同一性の決定に基づき、時間軸・空間軸に連鎖する人工物の系統的関係を構築するものであったことを明らかにする。そのうえで、同一性の決定に不可避的につきまとう主観性の問題に取り組み、製作工程という観点を分類に組み込むことで同定の客観性が高められるとし、これを自身の方法論と位置付けた。

第2章では、東北地方縄紋時代中期後半の型式編年研究の歴史をひも解き、現在の研究が混乱した状況にあることを示すとともに、そうした状況に至った問題点を整理したうえで、本論文で取り組むべき課題を明らかにする。東北地方縄紋時代中期後半には、最花式及びそれと同一型式とされる中の平3式が位置付けら

れているが、安達君は、基準となる標本の提示がないまま最花式が議論されてきたこと、また中の平Ⅲ式を含め、時間軸・空間軸の系統的關係に基づいた年代学上の単位として設定されてこなかったことを問題点として指摘する。そのうえで、最花貝塚遺跡の調査の歴史からみて、慶應義塾大学民族学考古学研究室所蔵の最花貝塚遺跡A地点1964年調査出土土器が、最花式の再設定の基準標本になるとし、その整理と分析の必要性を論じた。

第3章は、第2章で導出した課題に基づき、これまで未整理の状態であった最花貝塚遺跡A地点出土土器の整理作業の成果を報告した章である。177点に及ぶ出土土器の実測図、拓本、観察表を一次資料として提示し、それらを器形、法量、装飾によって分類するとともに、個々の分類群の關係を製作工程の観点から検討し、当資料が型式設定の分類の基準として適したまとまりをもつことを示した。

この最花貝塚遺跡A地点出土土器を中心に、第1章で提示した方法による分析を進めたのが第4章、第5章である。まず、第4章では、最花貝塚遺跡A地点出土土器と中の平遺跡Ⅲ群土器を製作工程の観点から分析し、見かけ上の類似から一つの型式にまとめられてきた両者が、系統的には相似の關係にある別々の型式として理解できる可能性を示す。そのうえで、最花貝塚遺跡A地点出土土器を基準とする型式を最花A式、中の平遺跡Ⅲ群土器を基準とする型式を中の平Ⅲ式と仮称した。

続く第5章では、土器の文様を、文様帯、単位文様、文様要素の3つの位相の構造体として捉え、最花貝塚遺跡A地点出土土器の文様と、中の平Ⅲ式を含めた東北地方北部、中南部の中期後半の諸型式の文様を位相ごとに比較し、その系統的關係を整理する。分析の結果、最花A式と中の平Ⅲ式は、ともに在地の榎林式から続く系統と東北中南部の大木9b式の系統の交錯によって成立するが、そのあり方の違いによって、同時期のふたつの型式として捉えられることが明らかになった。

最後の第6章では、中期後半の関東～東北地方の広域に及ぶ諸型式間の系統的關係を、主に製作工程と文様帯の系統に基づいて整理し、そこにこれまでの分析によって設定した最花A式と中の平Ⅲ式を位置付けることを試みる。この作業を通じ、本論で提示した方法が、広域の型式編年の整備にも有効であることを示すとともに、最花A式の文様帯の系統をより明確にするためには、北海道の型式編年の構築が不可欠であるという新たな課題を導いている。

審査要旨

本論文は、最花A式という縄紋土器の一型式の設定をめぐる研究であるが、その設定に至る過程を厳密に吟味することによって、系統分類学を踏まえた編年研究の方法の確立、編年の基準となる標本の選定、資料の構造を踏まえた組織的な分析、地域編年と広域編年の關係といった、考古学資料の編年研究全般に関わる重要な議論を深めることに成功している。本論文の評価は、最花A式というこれ

まで不明瞭だった土器型式を明示したことだけでなく、縄紋土器編年研究の方法論全般に関わる幅広い観点からなされるべきである。

安達君の方法論をめぐる議論で注目すべきは、難解と言われる山内清男の方法が、生物の系統分類学を参照することで体系的に理解し得ることを明示した点である。山内の方法が生物学と関係すること自体は、山内自身の文章からもすでに周知のこととなっているが、なぜ土器の文様帯という属性にこだわり、その系統論を編年の根幹と位置付けたのかという点をはじめ、山内の方法には未だ十分に理解されていない側面が少なくない。

安達君は、山内清男の文章や研究成果を系統分類学的観点から読み解くことを通じて、山内が、人工物においても、生物と同様に相同の関係にある形質の同定とその系統的理解が可能であると考え、縄紋土器全体を律する最上位の形質として文様帯を位置付けていたと理解する。そのうえで、山内の編年が現在も揺らいでいないことを重視し、今後の編年研究においても、相同な形質の同定と、そこにおける時間・空間の系統的關係の解明という山内の方法が継承されるべきであることを示した。また、相同性の判断の客観性を高める一つの手段として、製作工程の分析を組み込むべきであることを主張した。こうした議論は、山内の方法の発展的継承を目指す試みとして、多くの研究者の注目を集めることになるはずである。

本論文における基準標本の扱い方も、注目すべき本論文の特徴のひとつと言える。編年研究における基準標本は、研究の成果として、構築された編年観に合致したものが選択されて提示される傾向が強くみられる。これに対し、安達君は、最花 A 式の設定にあたり、まず、最花貝塚遺跡 A 地点の一トレンチから出土した土器群を一次資料として提示し、それらを、器形、法量、装飾、及び製作工程の観点から分類することにより、A 地点出土土器がひとつの特徴的な製作システムによって作られた有機的なまとまりとして認識できることを示す。そのうえで、他遺跡出土土器との比較分析へと進み、A 地点出土土器が型式の基準標本としての内容を備えていることを確認するという手順を踏んでいる。こうした点は、安達君が、基準資料を型式設定に従属したものとは考えず、両者の弁証法的な関係を強く意識していることを物語っており、編年研究における基準標本の位置づけや提示のあり方をめぐるひとつのモデルを提供したものと評価することができる。

なお、安達君は、最花貝塚遺跡 A 地点出土土器が基準標本になり得るという見通しのもと、それまで未整理の状態であった 61 箱にも及ぶ資料の整理作業を行っているが、こうした作業は、きわめて多くの時間と労力がかかるものである。このような地道な努力の積み重ねが、本論文の議論を説得力あるものになっている点も見逃してはならないだろう。

最花 A 式の設定を中心とする具体的な編年研究では、土器を複数の位相の構造体として捉え、それぞれの位相ごとに相同の関係にある形質の同定とその系統的關係の推定を進めるという、山内の方法に倣った組織的な分析が行われている。

特に、資料の緻密な観察に基づく製作工程の分析を加えたことにより、それまで同一の型式、あるいは同一型式のなかの新旧の関係として理解されていた土器群を、最花 A 式と中の平Ⅲ式という、系統的に明確に区分される時間的に平行する型式として捉えなおした手法は見事である。

加えて、こうした地域編年を広域編年のなかに位置付け、個々の形質の系統的關係の広がりをつかむことを通じて、地域編年の妥当性を検証しようとした姿勢も、限定された枠組みのなかでの議論に終始しがちな編年研究に、刺激を与えることになることと期待できる。

以上のように、本論文は、年代学上の基本単位である土器型式の設定をめぐる、きわめて信頼度の高い、重厚な研究として高く評価できる内容を備えている。一方で、本論文には、十分に解明できていない問題点や、今後に残された課題がないわけではなく、以下それらを指摘しておくことにする。

例えば、安達君は、山内の研究については緻密な検討を行っているものの、山内以外、特に山内以後の研究者の編年研究の方法論にはほとんど触れていない。もちろん、それは、まず山内の方法の体系的な理解を目指すという目的からの意図的な選択なのであろうが、山内が縄紋土器の編年研究において揺るぎない成果を上げたことは事実としても、本来的に構築論的な側面が強くなる編年研究において、山内の方法と成果への過度の依存は、研究を独善的な方向へと導く危険性があることも認識しておく必要がある。山内の方法の発展的継承を目指すのであれば、山内とは異なる視点による研究にも積極的に目を向け、山内の方法そのものをより広い枠組みのなかで捉え直す必要があることは疑いない。

また、本論文の核心である最花 A 式の設定にも、依然課題が残っていることを指摘せざるを得ない。特に問題となるのは、資料的な制約から、榎林式と最花 A 式・中の平Ⅲ式の間、未命名の型式を想定していることであり、この未命名型式の内容が明らかにされないと、厳密な意味で型式の系統的關係が解明されたことにはならない。もちろん、編年研究においてこうした資料的制約は珍しいことではなく、制約のある部分を、時空間に展開する系統の交差を手がかりに編年に組み込むことができる点も山内の方法の強みではあるが、安達君の議論では、最花 A 式の I 文様帯が北海道で残存した I 文様帯と関係する可能性を示しつつも、肝心の北海道の編年の整備が未了であることから、結局この方法からの系統的關係の解明も課題として残す結果となっている。

このように、本論文が幾つかの問題を含んでいることは間違いないが、安達君は、いずれに対しても、今後の課題として充分認識しているようである。その意味において、こうした問題の存在は、本論文の評価をいたずらに下げるものではなく、むしろ今後の発展の余地を示すものと考えておくことにしておきたい。

以上の評価により、審査員一同は、安達香織君の本論文を、博士（史学）の学位の授与に十分値すると判断するものである。